

国際仏教学大学院大学

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

第8号 2012.12

《古写経紹介・その八》

国仏本『摩訶止観 巻第一』について/廣坂直子・金水 敏

写経の定規/藤本孝-

《調査日記》

ルーヴァン大学図書館/上杉 智英

《文庫紹介》

身延文庫/南 宏信

《活動記録》

公開シンポジウム

テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開/上杉智英

觀明静前代未開 泉寺一夏数楊二時慈蜜雖樂竟不熟絕至見境 百演無常若空聞者悟道 其身法付尚非和 智者大随開皇士四 年四月廿六 法付毗難上造无我 甘 馬弟子鳴造頼 こと出胎験白手被

德運寺の古寫經』(非売品)

2007』(非売品)

 \mathbb{H}

研究所非常勤研究員

日臺共同ワ

伸一郎(本学附置国際仏教学研究所副所長)

· 床達也(本学附属図書館員 大康弘(本学附属図書館副

その他、学外研究協力者多

藤井教公(本学教授) 寺正俊(北海道大学准教)井牧子(筑波大学助教) 敏(大阪大学教授) 席研究員)) ン(本学教授) 人文科学研

本学春日講堂にて開催予定

落合俊典(本学教授

スタッフ紹介

を希望される方は下記連絡先にお知ら

三宅徹誠(元興寺文化財研究所嘱託研究員)

二十五卷』

教授)

CONTENTS

津田眞一(本学教授)

『日本現存八種一切経対照目録』(非売品)

『金剛寺藏 觀無量壽經

Toshinori OCHIAI, Stemmatic Relations Between Manuscripts in East Asian Buddhism	1
Naoko HIROSAKA and Satoshi KINSUI, Introduction to the Mohe zhiguan preserved in the Library of the International	
College for Postgraduate Buddhist Studies	3
Coichi FUJIMOTO, Traditional Rulers Used in Copying Manuscripts	5
omofusa UESUGI, Report on the Library of the Catholic University of Louvain	7
lironobu MINAMI, Introduction to the Minobu Bunko Collection	8
omofusa UESUGI, Report on the Public Symposium 'The Baoqieyin Dhāraṇī-sūtra as a Textual Source and Its Development'	g
Open Lectures	
Schedule, Publications, and Project Members	11

文部科学省 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「東アジア仏教写本研究拠点の形成」ニュースレター

いとくら第8号 平成24年12月1日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所

> 〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9 URL http://www.icabs.ac.jp

E-mail nihonkoshakyo@icabs.ac.jp

株式会社 高山

Newsletter of the Strategic Research Project for Private Universities Granted by the Ministry of Education of Japan Establishment of the Research Centre for East Asian Buddhist Manuscripts

ITOKURA Vol.VIII

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies

2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan

© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures of the International College for Postgraduate Buddhist Studies 2012

Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo

国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻一 巻首 平安時代中期(10-11世紀)書写。朱・白・緑・墨の訓点が附される。

目 次

《巻頭言》 東アジア仏教世界をつなぐ ———————	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	俊典	(1
一敦煌写本・海印寺写本・奈良平安写本一	冶口	IX. T	(1
《古写経紹介・その八》 現存最古写本に附される四種の訓点 国仏本『摩訶止観 巻第一』について――――――――――――――――――――――――――――――――――――	坂 直子・金オ	K 敏	(3
《特集》			
写経の定規 ―――――	藤本	孝一	(5
《調査日記》 カトリック大学へ寄贈された古写経 ルーヴァン大学図書館	上杉	智英	(7
《文庫紹介》 日蓮の学問態度を今に伝える 身延文庫	———南	宏信	(8
《活動記録》 公開シンポジウム テキストとしての『宝篋印陀羅尼経』とその展開 ——	——上杉	智英	(9
公開研究会 ————————————————————————————————————		_	(10
今後の予定・既刊書・スタッフ紹介			(11

いとくら: 私たちが調査している古写経を収める「経蔵」からの造語「経」を意味するサンスクリット語 "sutra" には「いと」などの 意味があり、また「経」には「たていと」という読みがあることから、「経蔵」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトル としました。

点の経論が挙げられています。その九五番が「出家人受菩薩 る名品の一つに数えられているものです。 戒法巻第一」(ペリオ二一九六)に比定されています。敦煌本は 戒経一巻」です。この本は敦煌本に見つかった「出家人受菩薩 う文書二点がありますが、前者(続修後集二十七)には一四三 書写年代が天監十八年(五一九)であり、南朝梁の書風を伝え 天平神護三年二月二十二日の日付がある「一切経本目録」とい ますが、それらは大日本古文書に収録されています。その中に 次の九六番は「在家人布薩法経一巻」です。この経典につい

第七』(重要文化財・神谷昭男氏蔵) に相当すると思います。 赤尾栄慶先生と私との調査で判明しました。『在家人布薩法巻 て今まではよく分かりませんでしたが、最近京都国立博物館の 九七番の書目は「菩薩羯摩一巻」ですが、これは見つかって ところで中国仏教史で皇帝菩薩と称される方がいます。そ

かし、「出家人菩薩戒法」という書名に疑問がもたれていま 六)に鑑みて本写本の史料的価値が喧伝されてきました。し おります。書写年代と武帝の治世下が一致しますので古来武 帝が僧の慧約から菩薩戒をうけた記録(『南史』 六、『続高僧伝』 れが梁の武帝です。実は敦煌本の奥書には「勅写」と書かれて

られます

日本の古写経についての古い記録は正倉院の文書だと思い

高僧ですが、いずれにしても敦煌と日本古写経との両方を見 が書名に間違えられることがあります。敦煌本も日本古写経 すえていかなければなりません。 律儀』(十四巻)と判明したのです。 道宣の著述『四分律行事鈔』という書物に日本古写経本の 本もどうも品題ではないかと見当をつけて調べたところ、唐の 武帝と宝唱です。宝唱は『経律異相』などを編纂した著名な 文を引用した個所がありました。その結果、この書名は『出要

だと考えております。

後代の学僧であったようです。私は、この人物こそ真の著者

選述者も記録されていたのです。「西京玄法寺行真法師造」と

あります。実はこの行真は玄奘三蔵と同時代、

あるいは少し

したが、ここには『阿弥陀経疏』が抄出されていただけでなく、

先生、それに筆者との合同調査で十一世紀頃の写本といたしま

紙に墨書された写本が出てきま

した。韓国の学者と赤尾栄慶

さらに驚くことがありました。韓国の海印寺の仏像から白

料の一部ですが、 もう一つだけ例を挙げてみましょう。

激論が交わされてきたのですが、古来僧肇の撰述内容が不明 そもそも本書を慈恩大師撰とすることについては百年前から その内容は慈恩大師撰とされる『阿弥陀経疏』と同一でした。 撰とされる幻の書物『阿弥陀経義疏』が書写されていました。 その折に特別調査をさせていただいたのですが、紙背には僧肇 書食貨志』を名古屋市博物館へと寄託先を変更しました。 した。その時、長らく東京国立博物館に寄託していた国宝『漢 先ごろ大須観音真福寺は名古屋市博物館で展観をいたしま

した。日本の神谷本も同様でこれは書名に相当しないと考え

一般に経典は品題が付されているものが多いのですが、これ 著者は二説あります。梁の

以上の仏教写本研究は現在私どもが取り組んでいる文献資

の書と確定したことは大きな進歩でした。 なため研究の前進が緩慢となっていたのです。僧肇撰は仮託

についても順次報告していきたいと思います。 仏教写本の対照研究があります。その他の興味深い仏教写本 があり、また韓国の海印寺写本と日本の国宝紙背に書かれた にある六世紀の敦煌写本と八世紀の日本古写経本の比較研究 開を見せるようになってきました。ここに挙げたように、パリ 以上のように東アジア仏教写本研究はその名に相応しい展

(1)『大日本古文書』巻一 昭和一五年。 明治三四(

(本学プロジェクト「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者) (2) 『大須観音 いま開かれる、奇跡の文庫』(大須観音宝生院、二〇一二)

古写経紹介・その八

国仏本『摩訶止観 巻第一』 につ

廣坂直 子 :金水

の訓点が付されていることである。 特に、朱・白 の本を特徴づけているのは、朱・白・緑・黒の四種 現存する最古の写本ということになる。 さらにこ 遺品は発見されておらず、この国仏本が本邦に 円珍らが将来したことが知られているが、それら (赤尾栄慶二〇〇八)。『摩訶止観』は言うまで 安中後期(一〇~一一世紀)の書写と見られる 持たないが、書体その他の徴証により本文は平 という)『摩訶止観 巻第一』一巻は、奥書を もなく天台三大部の一つであり、鑑真、最澄、 国際仏教学大学院大学所蔵(以下、「国仏本」

> 仮名点で巻頭部のみに付されている。 体が同じで、一部分のみの加点である。 る。緑点は朱・白とヲコト点の配置、仮名字 の二種は巻全体に渡って稠密に付されて 黒は

間は九九九~一〇〇四)。また築島裕『平安 外的である。」(九一頁)と述べている(長保年 語新論』(一九六九) に「摩訶止觀 卷第一・ 般に壺の内の星點が少いのに、この資料は例 て紹介され、「長保頃の加點。第五群點は一 五・九 三卷 酒井宇吉氏・石山寺舊藏」とし 本書の訓点については、築島裕『平安時代

一世常如是道是行通化城觀身~公力至觀心之空 心赴心起即假~名之心為迷解本謂四諦有無量相三果 思滅名薄名蘇名已解乃至侵習名降女佛是人目 所是人見諦滅名酒拖酒是人思惟滅名三果是人見 常非安非不安乃至龍心亦如是了首品好通賣 成名十行十四回 要取減名十地等 意为意見人見思 心而生れ解解如黃師洗為諸色逢以楊樂所謂翻 松重集九界外軽重集 れ知是生死是か以軽重告れ 心如毒師這種一色心構云道分别校計無重種別謂的 南的皇道品直通化城翻 写無、常、問言力至勸 一批是为非時非脫祭一具云菩提心頭是義的 非不净雙照海不軍力至衛心法性常無常變或常無 国仏本『摩訶止観 巻第一』 朱、白、緑の訓点が見える。

「専誦シ」と読み下せる仮名点があり、白点と (二〇〇七) に書誌等紹介あり) で見てみると、 (一一七四年頃書写、一一七八年加点、赤尾栄慶 年代がやや下る金剛寺蔵本の『摩訶止観』 誦し」となる。ちなみにこの部分を書写・加点 えるので、白点での新たな読みは「十年専(ら)・ るのである。 同様の読みが右訓に採られていることが確認され るのみであるが、右訓に「専ラ誦シ」、左訓に 「専」と「誦」の間には句切り点らしきものが見 専 -誦・」と合符が付され

も見えるが、七から八行目にある次の例もご覧い この例①では白点が別訓を示すだけのように

鹿苑中驚 頭後

始康第中 **鹫頭後鶴林** 鶴林

> と考えられるのである。 正・付加すべき箇所にのみ白を加えている」 朱点は見せ消ちを付けずそのまま生かし、訂 と考えられる。つまり「変更する必要のない は鹿苑・中は鷲頭・後は鶴林なり」であろう 一方白点を加えた後の読み下しは「始(め) 鶴林に(し)たまひき」であろうと考えられ、 は「始(め)は鹿苑・中コロは鷲頭・後には 例②において朱点で得られる読み下 し文

のではないかと考えている。 ルで二度目の全体に渡る訓読が記録された 多く存在するが、基本的にはこのようなル 意味に頭を悩ませなければならない箇所も 際にはもっと混沌としていて、点一つ一つの ているかというとそういうわけではなく、 全体に渡ってこのルールが厳密に守ら 実

様である(金剛寺蔵本との詳細な比較、関係あって、やはり白点を加えた方の読みと同 ハ鹿苑・中ハ鷲頭・後(は)鶴 金剛寺蔵本のこの箇所の読みは「始(め) (人) 林ナリ」と

> などの奇異な假名字體を持つ。(中略) 奥書はな 時代訓點本論考 と考へられる。」(五〇六~五〇七頁)としている。 ても、恐らく天台宗延暦寺關係の加點であらう いが、本文が天台三大部の一であることから見 「う」(ネ)、「女」(メ)、「つ」(ヤ)、「ち」(ヱ) 「ル」「キ」「リ」「ス」などの星點があり、「モ」(テ)、 異があるらしい。 朱點と白點とは、壺の内部に 代中後期で同じ頃であるが、ヲコト點は夫ペ小 「加點年代は、朱點・白點・綠點何れも平安時 本書の加点でもっとも注目すべきは、白点であ 研究篇』(一九九六)では、

反切注、義注、異本注記などが記されている。 論考 ヲコト點圖 假名字體表』(一九八六) 掲 二種の点について、主にその関係を簡単に述べる。 に付けられている点が興味深い。以下、この朱・白 通であるが、本書では平安中期と、白点資料と ば、一般には白点が古く朱点が新しいことが普 なくなった。 同一文献に白点と朱点が付いていれ 初期にはよく用いられたが、その後次第に用いられ とができ、また自然に剥落することも多い。平安 能である。ヲコト点・仮名点以外にも、声点や 載の点図及び字体表を使って読み下すことが可 読み取ることができ、築島裕『平安時代訓點本 る。 伸びが悪く書きにくいが、乾くと拭き取るこ ろう。 白点は胡粉を水で溶いたものによって付け しては比較的遅い上に、白点と朱点はほぼ同時期 まず朱点は、巻全体に渡って肉眼ではっきり

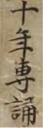
見調査では室内を薄暗くし、LEDライトで反 肉眼でもある程度見えるようになってくる。 実 見えにくくなっているが、中ほどに進むにつれ 一方、白点は、巻首にあっては剥落により

> 射させながら確認作業を行った。このようにする 雅幸先生のご教授による)。 まった点もかなり見やすくなる(この方法は月本 と肉眼では見落としてしまうような薄くなってし

点に先んじて付されたことが分かる。 確認でき、このことから国仏本では朱点が白 ない白線が朱点から伸びているのが何カ所も は表情を異にする多数の細めの線が付されて られる他、特に珍しいのはヲコト点の線点と いることである。ヲコト点でもなく、仮名でも 白点についても朱点同様、様々な情報が得

の白点によって、訂正や新たな情報を加えながら の部分を例に見てみよう(赤は朱、青は白を表す)。 読み直していると解釈することができるのである。 同パターン(ヲコト点の配置、仮名字体がほぼ同じ) 点を用いて一旦読み下されたテキストを、 やら「見せ消ち」である可能性が高い。つまり 解読作業を進めていくと、これらの白線はどう 本文三十行目二字目から五字目「十年専誦」 朱点と





「誦」字に朱で付されている「する」「こと」「を」 点を見せ消ちにして新たに「し」点を加えている。 消ちにして訓読指示の記号(左中・)を付し、 字に付されている朱のヲコト点「に」「し」を見せ 読み下し文が得られる。次に、白を見ると「専」 るので、「十年誦することを専(ら)にし」という 字に「する」「こと」「を」のヲコト点が付されてい まず朱では、「専」字に「に」と「し」、「誦」

性の検討は今後の課題である)。

訓点が付されていた可能性もあるだろう。 校合を行ったことは確かであるから、それに 本を参照した跡がいつくも見受けられ、本文 緑)のように「唐本」や「或本」と呼ばれる別 「云云字有唐本」(三六行目·朱)「唐本無而字」 とではないだろうか。実際、異本注記として による校合が行われた可能性があるというこ 結果から想像できることは、朱点による読み 行われている読みに近い傾向がある。この (四一五行目·朱)「或本無経字」(四一八行目· ると、大方において白によるものの方が今日 全体的に朱白の読み下し文を比較してみ しの後、より正確な読み下しを施した別本

訓読された当時、幾本かの将来本や写本が既 響力は仏教界のみにとどまらず、『源氏物語』 違いない。 に存在し、夫々訓読が行われていたことは間 など日本文化にも広がった。国仏本が書写、 による将来が確認されている。そしてその影 (七六六~八二二)、円珍(八一四~八九一) (六八七~七六三)をはじめとして、最澄 根本聖教の一であり、日本へも鑑真和尚 『法華文句』と並んで天台三大部と称される 前述のごとく、『摩訶止観』は『法華玄義』

読史について明らかにできることがさまざま 詳細に見ることによって、『摩訶止観』の訓 あるものと期待できる。 ることは困難であるが、訓点等の書き込みを あるため、本文や訓点のルーツをこれ以上遡 現在ではこの国仏本が本邦最古のもので

- 赤尾栄慶「天台聖教の古写本 の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究 究(A)課題番号一五二〇二〇〇二 釈」(『平成一六~一八年度科学研究費補助金基盤研 天台三大部とその注 金剛寺一切経
- 赤尾栄慶「国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻 学学術フロンティア実行委員会、二〇〇八) 第一の書誌学的研究」(『国際シンポジウム 報告書《第一分冊》』研究代表者 典研究の新時代 講演資料集』国際仏教学大学院大 落合俊典、二〇〇七)
- 池田魯参『詳解摩訶止観 天・地・人』(大蔵出版 一九九五~一九九七)
- して―」(『訓点語と訓点資料』七七、一九八七)小林芳規「見せ消ち符号について― 訓点資料を主と
- 関口真大『摩訶止観―禅の思想原理 上・下』(岩波

書店、一九六六)

- 池麗梅「国際仏教学大学院大学蔵『摩訶止観』巻第 究の新時代 一の系譜について」(『国際シンポジウム 講演資料集』国際仏教学大学院大学 漢訳仏典研
- 築島裕『平安時代訓點本論考 築島裕『平安時代語新論』(東京大学出版会、一九六九) 学術フロンティア実行委員会、二〇〇八) ヲコト點圖 假名字體
- 築島裕『平安時代訓點本論考 一九九六) 研究篇』(汲古書院

表』(汲古書院、一九八六)

謝辞

俊典氏はじめ国際仏教学大学院大学関係者の皆様に格 国仏本『摩訶止観 巻第一』閲覧に当たっては、落合

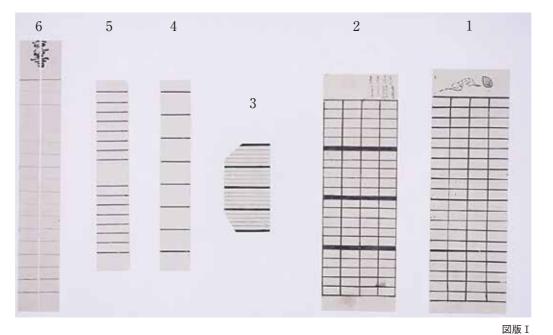
金水 廣坂 直子 (研究協力者 敏(研究分担者 京都外国語大学非常勤講師) 大阪大学教授)

の定規 藤本 孝一

れた筆や罫線が引かれた下敷類が伝存する。 まさに書いていたと思われる書きかけの写本。それに用いら の歌書類の写本が多く襲蔵されている。特徴の一つに、今 (一七六七) に造られた。和歌の家柄に伴う俊成・定家以来 間(一六一五~一六二四)に造られ、御新文庫は明和四年 のうち典籍蔵は御文庫と御新文庫である。御文庫は元和年 御新文庫・常倉・角倉・台所蔵と呼ぶ五棟の土蔵がある。こ 歌人の藤原俊成・定家を家祖に持つ冷泉家には、御文庫・

さや横線の数に合わせて仕分けをしてみた。 まった。縦にしてみたり、横にしてみたりした。まず、大き 線が書かれている。これは何に用いられたものかと迷ってし 何十枚も入っていた。その短冊状の紙片には墨で何本も横 てきた。その中を見ると、幅の狭い長方形短冊型の紙片が 現在、御新文庫の調査中である。函番号「夕函」が出され

墨で蓮花の模様が描かれていた。二枚目(図版Ⅰ─2.縦─1.縦二十三・三㎝横七・二㎝横線幅○・九㎝)は天に 迷っていた時、短冊が二枚一緒にあった。一枚目(図版Ⅰ



で作られている。 して解説(前述のものは除く)する。それぞれは厚手の楮紙

3. 偈頌四字用。縦八·四㎝横四·四㎝。間が二·一㎝幅 になり、その間に○・三四幅の細線が七本引かれている。

偈頌七字用。縦二十五・七㎝横二・八㎝。二・一㎝幅

4.

- で墨線が引かれている。
- 5 偈頌七字用。縦二十五・七㎝横三・七㎝。一・一㎝
- 6 幅で墨線が引かれている。天に「覚等」の墨書をした紙 で墨線が引かれて、中間の幅は三・二四である。 を用いて作り、あとから切った。「覚等」は法名で冷泉家 十七字用二枚。各縦二十九・五四横一・九四。一・一四

六代当主為泰 (一七三六~一八一六) である。

かは不明であるが、写経用と一緒にあったことで、一応ここに 写経用か。外側の横線十 掲載した。縦三十・〇㎝横五・六㎝。一・四㎝幅で墨線が 引かれている。中央の四角開きは縦一・二㎝横一・四㎝である。 九字用か、真中の四角開き

> は天に墨書があり、 二十二・六四横七・一四横線幅一・九四)

安楽行本四月廿四日 方位品同月廿日同月廿四日 普門品十一月十九日

と読めた。法華経の巻名である。これ

寿量品四月廿五日

により、供養の際の写経に用いられて いたことが判明した。 決定的なものは図版Ⅱである。この

100 mm

0) 折ってから罫線を引き、折山・折谷の線は引かないことから である。折本装は紙を継いで巻子本にしてから折る。次に 線がなく、その個所は折谷になっている。この装訂は折本装 薩行法経』(観菩薩経)であった。また、この紙には一か所罫 深妙義歸依佛歸依法歸依僧是三説」と続く『仏説観普賢菩 二十・二㎝一行幅一・七㎝)は、文末の「大乗経」の後に、「甚 二十五.九㎝横十二.〇㎝界高 三点は紙に包まれていた。この黄蘗染 ろから、写経の書きかけのものではなく、写経を始める前の わかる。また、天の一部が切られている。当初の断片のとこ 写経紙片(図版Ⅱ-縦

であるとわかった。残りの短冊 (図版Ⅱ―3. 縦二十八・八 隔を均等に取るために、罫線にあてて経文を書いていた定規 を天地の界線に合わせてみると、ぴったりと一致した。横線 二十五・九㎝横二・〇㎝界高二十・二㎝横線幅一・三㎝) 筆馴らしの用紙である。 m横二・六m界高二十一・一m)は、墨書に「光明真言/ハ から、写経の際に縦線は引かれているが、一行十七文字の間 一尺三寸タテ二尺六寸」と幅と縦の寸法と、横幅一・四 も十八本が引かれ、写経の一文字一文字の間に合う。これ そこで、紙片と共にあった短冊(図版Ⅱ 2 縦

中間就今天後 板好不 門与州中田會林 證 知我 至苦 个 に沿って十五文字の横線内と外に「唵阿謨伽尾嚧左嚢摩 大機諸菩薩顾為我作我今 釋過年尼佛為我和上之殊師到為 終不数務請体二法 以是因 禄功榜受 依大京 2 3

定される。 賀母捺囉摩抳/鉢納摩入縛攞鉢囉韈哆耶吽」の真言が書 代為村(一七一二~一七七四)前後の十八世紀のものと想 これらは筆跡や紙質、他の納入品から見て、冷泉家十五 かれている。これも光明真言を書くためであっただろう。

本古代文書の研究』吉川弘文館、平成十三年刊)。 る横十七文字用で吸取紙を兼ねたものがある(杉本一樹『日 正倉院にも写経用の用紙で、奈良時代の「下纏」と呼ばれ

五・七字などの偈頌用もある。 は写経用の横線の定規であった。他の紙片をみると四・ を用いて「墨罫にあてて」書くと明記する。この一群の紙片 紙のスミケイニコノイイヲアテ、テ書」や「写ス紙スミノ引タ とを示唆したものが、他の箱にある。御新文庫「堺函」に、「写 するための道具類であった。横線にしたがって写経するこ ルアル部ニコレヲ用ル也」と書いた紙片があり、この短冊型 判って見ると「夕函」に入っている短冊は、写本や写経を

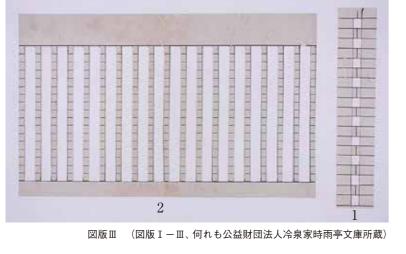
次に、この箱に収納されている中から主なものを図版掲載

線の柱幅○・八㎝、横線は一・二㎝幅で引かれている。 横四十五・八四界高二十・七四、空間幅一・二四、罫 白紙に用いた罫線枠。雲母が塗られている紙に書く所 だけを切り抜き、脇に横線を引いている。縦二十七・三㎝

2

仏典の研究者でない。この疑問を述べてみる。 かと、疑問が起こってきた。私は写本学を専攻しているが、 だわっているのはどこから始まり、どのような意味があるの 写経をするとき、定規を使ってまで、一行十七文字数にこ

ると邪魔になり読みにくい。 引かれている。むしろ『平家納経』などの装飾経は、金泥や 罫線は引かずに下敷や罫線枠を置いて書写をする。罫線があ 写経をする場合、紙面には罫線が引かれている。写本の場合、 しかし、経典のほとんどには罫線が



を引くのであろうか。また、写経の際「真行草」の書き方が あるのに、真名字である楷書で、一文字一文字書写をする。 は罫線があまり引かれていない。経典ばかりがどうして罫線 銀泥で線が引かれて目立たせている。注疏などの注釈書に たのであろうか。私なりに答らしきものを出してみる。 「行草」は注疏には多くある。このようなことがなぜ起こっ

文字と決められたのであろうか。 筆者には、かいもくわからない。 味になる。そうなると、『開元釈教録』の時点では、すでに ると紙数も半分になる。字数を決めなくてはこの紙数が無意 ていない。一行三十四字の細字経などもあり、字数が倍にな 計画が立てられる。が、ここには一行何字であるかは書かれ 十七文字が一般的であったことになる。いつの時点で十七 数が確定されている。紙数が決まっていると、容易に写経の (七三〇年完成)の特徴は、経巻が決められ、さらに巻の紙 一切経五千四十八巻の基本になった智昇撰『開元釈教録』

四一三、一説に三五〇~四〇九)と玄奘三蔵(六〇二~ あり、唐王朝の太祖が玄奘に漢訳を命じた国家事業である。 われている。 経典の内題の下に「三蔵法師玄奘法奉 詔訳」が 六六七) がいる。 玄奘訳を新訳と呼び、それ以前を旧訳とい 例えば、梵字から漢訳する場合、鳩摩羅什(三四四

字が決められたとすると、何種類も自由に訳されていた経典が、 できるならば、十七文字や偈頌であろうか。「行草」だと判読が による一種の思想統制ではないかと思ってしまうのである。 る。大げさに言えば、自由に漢訳がなされていたのを、新訳 一つに決められたことになる。仏教は哲学であり、思想であ 分かれることが起きる。 だれでもわかる楷書で書き、紙数と文 一行十 そうなると、漢訳する際に編集方針が決められていたと想定 七文字は当たり前の話であるが、解説書を探した

この場を借りて教えを戴きたい (龍谷大学客員教授)

り、人に聞いたりしても筆者の納得できる答を得ていない

失

命談 孕

図版Ⅱ

調査日記

ヴァン大学図書館

catholique de Louvain〈UCL〉)図書館所 のルーヴァン・カトリック大学(Universite 栄慶、本井牧子、上杉智英の四名にてベル i ル 二〇一一年七月一一日、落合俊典、 -ヴァン・ラ・ヌーヴ (新ルーヴァン市) 赤尾

むものであったことが伺える。

蔵の古写経調査を実施した。

二万七千冊と、各国の図書寄贈、支援の ションとなった。 当時、国外最大規模の日本図書コレク 年より一九二六年にかけ、三、二〇二部 もと復興を遂げた。日本からも一九二四 冊、イギリス五万五千冊、アメリカ 運動」設立宣言による国際事業の発足に 校でもある。同図書館は一九一四年、第 ル を誇るカトリック大学であり、メルカト 一三、六八二冊の寄贈がなされ、これは 一次大戦の戦火によって烏有に帰した 一四二五年創立、ヨーロッパ屈指の歴史 図法のゲラルドゥス・メルカトルの母 一九一九年の「ルーヴァン国際支援 ベルギー ヴァン・カトリック大学は 十五万冊、フランス八万

> 岩崎家、三井家、古河家、末延家、渋澤家、 塔陀羅尼、古活字版等の貴重な仏書を含 師寺経、東大寺八幡経、中尊寺経、百万 目録』によれば、天平写経、神護寺経、薬 で、『ルーヴェン大学図書館ニ寄贈図書 に収集された(関東大震災後の為)もの 日本銀行等の寄付金により、 大学からの寄贈の他、宮内省、住友家、 これらの図書は宮内省図書寮や早稲田 関西を中心

カトリック大学へ寄贈された古写経

四三点であった。日本より寄贈された図 したが、現存が確認されたのは一○部 これら目録に記載される稀覯書八三部 中、三〇部九五点の仏書を調査対象と



UCL人文学部図書館 貴重書室

在は不明である。 書は一九四〇年の第二次世界大戦の戦火 が高まり、ルーヴァン大学も一九六八年 ンス語系住民とオランダ語系住民の対立 を免れたとされているが、未確認分の所 一九六〇年代以降、ベルギー - ではフラ

蔵書分配が関与しているのであろうか。 願いは、現代の我々と何ら変わらないの められた尊い仏典を未来へ伝えたいとの にしなかったであろう。ただ、そこに込 賀茂郡少松寺常住」との奥書が記されて れた。或いはこの大学分裂に伴う有名な ル のカトリック大学に蔵されるとは夢想だ いた。これを記した者も、よもやベルギー ルーヴァン・ラ・ヌーヴへと移転新設さ カトリック大学(UCL)に分裂、UCLは 〈KUL〉)とフランス語系のルーヴァン・ ク大学 (Katholieke Universiteit Leuven にオランダ語系のルーヴェン・カトリッ 調査した『大般若経』刊本には「濃州 ーヴェン市の南方約三〇km、現在の

調査風景

謝辞

ではないでしょうか。

並びにUCL 人文学部図書館の皆様に 深く感謝の意を表します。 W.F.Vande Walle 日本学主任教授、 ルーヴェン・カトリック大学(KUL) 調査にあたりご高配を賜りました

- 山崎誠『ルヴァン ラ ヴォルフガング・シヴェルブシュ『図書館炎上二つの (勉誠出版、二〇〇〇) 書・ウニベルシタス三八五、法政大学出版局、一九九二) 世界大戦とルーヴァン大学図書館』(福本義憲訳。 ヌーブ大学蔵日本書籍目録』
- \cdot W.F.Vande Walle \lceil The Japanese donation to the ルーヴェン国際事業委員会編『ルーヴェン国際事業 交流 関西大学東西学術研究所創立五〇周年記念国際 University of Louvain」(藤善真澄編『東と西の文化 委員会事業成績報告』一九二六(国立国会図書館近 シンポジウム01報告書』、関西大学出版部、二〇〇四)
- 同右付録乙号『ルーヴェン大学図書館ニ寄贈図書目 pid/969093>2012/09/10 アクセス) 録』一九二六(国立国会図書館近代デジタルライブラ http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/

info:ndljp/pid/980564>2012/09/10%

代デジタルライブラリ

http://kindai.ndl.go.jp/

(上杉 智英)

多延文庫

時代区分を久遠寺歴代法主を軸として以

のように大別しています

一妙氏 (一九〇四―八三) は身延文庫の

現在に至るまで継続されています。室住

以来、歴代法主によって入蔵、整理が

身延文庫の時代区分

(第一期) 日蓮在世時代

文庫紹介

身延文庫

- 〈第二期〉 第十一世日朝入山までの約二百年 日蓮滅後から寛政年間(一四六一―
- 〈第三期〉 日朝入山から弘治年間 (一五五五―五七) 日鏡までの四代約百年
- (第四期) 第十五世日叙から第二十七世日境に 至る約百年
- 〈第五期〉 第二十八世日奠から第七十二世日健 (明治七年) までの約二百二十年
- (第六期) (『行学院日朝上人』、大東出版、一九九九年)。 一五〇〇) が寺門を経営・教学を振興させます 特に第三期、第十一世日朝(一四二二一 第七十三世日薩から現在まで

第五期には第三十一世日脱(一六二七 九八)が東西両蔵の規制を制定し、霊

身延文庫の継承

宝物館入口

の経典・書籍・聖教・古文書類を所蔵してい 宗総本山久遠寺内に設立されており、多数

文庫創立の淵源は日蓮(一二二二一

身延文庫は山梨県南巨摩郡に在る日蓮

身延文庫の創建

身延文庫の名称

書状を出しました。「曽谷入道殿許御書」の書状を出しました。「曽谷入道殿許御書」の 問・資力共に有した大檀越曽谷・太田両氏に (一二七四)三月、身延山に篭った日蓮は、学 八二)の在世時まで遡ります。文永十二年

称の初出です。多数の蔵書に押されてい 境(花押)」とあるのが「身延文庫」の呼 御書籍目録』(日境筆)により知ることが 師の創意にかかるものと見られます。 る黒印「身延文庫」(牌型)もおそらくは でき、「身延文庫/暹師御書籍目録/日 補・函の入れ替えを行ったことが『暹師 六四八) と第二十七世日境 (一六〇一 第四期の第二十六世日暹(一五八六ー 五九、天海版を入蔵)の文庫事業で修

頼しています(『昭和定本日蓮聖人遺文』 を防ぐため、保存と更なる蒐集・拡充を依 する聖教の散失、文字の脱落、謬語、損朽 習学スベシ」(原漢文)といい、自身が所持 必ズ一代ノ聖教ヲ安置シ、八宗ノ章疏ヲ 中で「此ノ大法ヲ弘通セシムルノ法ニハ、

一巻九一〇頁、一九八八年改訂増補版)。



宝類を厳重に管理しました。惜しむらく は明治八年(一八七五)の大火で堂塔伽

継続整理の結果昭和五十一年(一九七六)

には『身延山久遠寺身延文庫所蔵文書・

正にかけて島智良氏が整理修補し、江利 た。その後身延山復興事業で明治から大 ことですが、東西両蔵は類焼を免れまし 藍一四四棟と多くの財宝什器が焼失した

山義顕氏・室住一妙氏・林是幹氏による



新羅僧義寂撰『無量寿経述記

態度の継承に基づくものと推測されます。 刻を本学「善本叢刊第五輯」として刊行予 量寿経述記」(断簡)なる書物があり、これ 宗ノ章疏ヲ習学スベシ」という日蓮の学問 が貴重な浄土教典籍を蔵していることは「八 定)。入蔵時期は未詳ながら日蓮宗総本山 出現は意義深いことです。(本年度影印・翻 知る術がなかったので、今回の身延文庫本の 逸文を蒐集した「復元本」しかその内容を とを確認しました。これまで逸書とされ、 が新羅僧義寂撰『無量寿経述記』であるこ の部(巻下、三一頁)には作者未詳で「無 紹介します。『身延文庫典籍目録』の余宗 最後に身延文庫が蔵する浄土教典籍を

附記

閲覧の機会を賜りました身延文庫の 御礼申し上げます。 吉村明悦文庫長、渡辺永祥主事に厚く

[参考文献]

・江利山義顕「身延文庫に就いて」(『身延山と私』 所収・・室住一妙 『身延文庫略沿革』 (身延文庫、一九四一年) 室住一妙 『身延文庫略沿革』 (身延文庫、一九四 一九七一年)

転し、所蔵品は宝物館で一般公開もされ 身延山宝物収蔵庫が本堂地下に完成・移 絵画目録』が公刊されました。また同年

ています。七百年余りに渡り幾度となく

林是簪「身延山の自然と文化財」(『身延山 久遠寺史 研究』所収、平楽寺書店、一九九三年)

大成として『身延文庫典籍目録』上中下 目録が作成されてきましたが、近年その集

(身延文庫典籍目録編集委員会、二〇〇四

年)が公行されました。

南宏信「新出 義寂撰『無量寿経述記』写本の検討」 (『豊교학司県(仏教学レビュー)』七、二〇一〇年)

活 動 記

公開シンポジウム 宝篋印陀羅尼経』とその展開 アキストとしての

開催した。 としての『宝篋印陀羅尼経』とその展開」を との共催による公開シンポジウム「テキスト て」(研究代表者:後藤昭雄 (成城大学)) と研究―聖教の形成と伝播把握を基軸とし 基盤研究B「金剛寺所蔵典籍の集約的調査 おいて、日本学術振興会科学研究費補助金 二〇一二年七月二一日、本学春日講堂に



写され、今一つは仮名書状を紙背として墨 がしたためられた料紙に金泥にて経文が書 が伝来している。一つは今様・和歌・消息 (一切如来心秘密全身舎利宝篋印陀羅尼経) 府河内長野市)には二点の『宝篋印陀羅尼経 真言宗御室派の古刹、天野山金剛寺(大阪

化財に指定されている。 書にて書写されるものであり、共に重要文 従来、『宝篋印陀羅尼経』は料紙に見出さ

旨であり、また共催の所以でもある。 を志向することが本シンポジウム開催の趣 篋印陀羅尼経』を巡る宗教文化事象の把捉 研究を並行することで、より包括的に『宝 キストとしての『宝篋印陀羅尼経』」の本文 開」と位置付け、その信仰の源泉となる「テ 殆どであったが、それら信仰の表出を「展 等、個別研究の視座より論じられることが れる和歌や今様に対する文学研究、消息経 に対する古筆学、銭弘俶塔を含めた美術史

役職等は研究会開催当時のものです) 発表者及び発表題目は以下の通り(所属、

【午前の部】

司会 「宝篋印陀羅尼経の本文比較とその源流」 落合 荒木 俊典 (本学教授) 浩(国際日本文化センター教授)

赤尾 栄慶(京都国立博物館企画室長

「文化財的観点からみた金剛寺本宝篋印陀 羅尼経」

小島 研究員)

法舎利としての経典―」

【午後の部】

司会 デレアヌ・フロリン(本学教授) 正俊 (北海道大学准教授)

釋 智如(ポモナ大学准教授)

at Leifeng pagoda] the Baoqieyin Dhāranī Sūtra manuscripts

李

「韓国における宝篋印陀羅尼経」 鈆植 (木浦大学校教授)

京都大学大学院客員教授)

して刊行する予定である。

踏まえ、その成果を『善本叢刊』の一冊と 換が行われた。本シンポジウムでの議論を を行い、発表者、聴衆を交え活発な意見交

裕子(本学日本古写経研究所特任

ご来臨、誠にありがとうございました。

(研究員 (PD))

だき、盛況のうちに終了致しました。沢山の

当日は五〇名を超える方方にご参加をいた

和歌史上における金剛寺本宝篋印陀羅尼経」 金剛寺伝来の宝篋印陀羅尼経と信仰 圭介 (国文学研究資料館准教授)

「宝篋印陀羅尼の梵漢比較」

The architectural and religious functions of

際寧(中国国家図書館善本特蔵部 研究員)

研究」 中国国家図書館蔵『雷峰塔経』版本系統 廣錩(上海師範大学教授)

午後3時~ · 4 時半

於 国際仏教学大学院大学 春日講堂

南 楊 「興聖寺蔵『出三蔵記集』の系統について」 「新羅義寂撰『無量寿経述記』の研究 宏信(本学プロジェクト研究員(PD)) 恵谷復元本と身延文庫本

> 明本との本文比較により開宝蔵本の転写本 初雕本、高麗再雕本、金蔵本、宋本、元本、 ④については特に巻一五を取り上げ、高麗 ることで開宝蔵本系統であると比定された。 対しては諸刊本大蔵経の千字文号と対照す 明らかでない③と④を取り上げられ、③に 巻二、巻四、巻一五)に分類し、その藍本が

とするものがあることを実証された。

れていない経巻であっても開宝蔵本を藍本 であると比定され、開宝蔵の刊記が転写さ

(巻三、巻五、巻九、巻一一)、③千字文号の ②開宝蔵本の刊記のみ転写されている経巻 号の二つが転写されている経巻(巻一○)、 巻に着目され、①開宝蔵本の刊記と千字文 巻一二、巻一三、巻一四)、④開宝蔵の刊記 みが転写されている経巻(巻六、巻七、巻八、 れる平安時代後期写『出三蔵記集』全一五 楊氏は興聖寺(京都市上京区)に所蔵さ

寂(七世紀中

八世紀初)の『無量寿経述記』

る逸文しか確認されていなかった新羅僧義

一〇七七)撰『安養集』、了慧道光(一二四三

南氏は、従来源隆国(一

〇 〇 四

-一三三〇) 撰 『無量寿経鈔』 等にみられ

巻一の写本断簡(身延文庫蔵)を紹介され、

小田 壽典 (豊橋創造大学名誉教授)

「金剛寺蔵古写本による『大乗義章』の

一平(恵泉女学園大学非常勤講師)

成立と編纂とテキストについて」

「偽経本「八陽経」写本からみた仏教文化



とその配列順序を記した『大乗義章義目』

(共に天野山金剛寺蔵)の概要を紹介され、

義章』の院政期写本(全二〇巻中一六巻分) 影寺慧遠 (五二三―五九二) の主著 『大乗

岡本氏は南北朝末から隋初に活躍した浄

の成立・編纂・原テキストに言及された。 められ、両本を止揚することで『大乗義章』 ○平成24年度第1回公開研究会 平成24年5月19日 (土)

も千字文号も転写されていない経巻(巻一、

婷婷(本学プロジェクト研究補助員(RA))

○平成23年度第2回公開研究会

平成23年11月12日 (土)

午後3時~4時半

於

国際仏教学大学院大学 春日講堂

催当時の表記です)。

第1回公開研究会について、概要を報告致

昨年度第2回公開研究会、並びに今年度

公

開

研

究

会

します(発表者の所属、役職等は研究会開

されると共に、引用経典の検討により、その 訳出の六八三年の一二年の間と推測された。 間、新羅における撰述と考えるならば義寂の 『大般若波羅蜜多経』訳出の六六三年より 成立年代を長安における撰述とするならば 従来の逸文に基づく復元本の問題点を指摘 師義湘帰国の六七一年より『方広大荘厳経』 『方広大荘厳経』訳出の六八三年の二〇年の

ご支援を賜りますようお願い申し上げます にありがとうございました。今後とも一層の 公開研究会ともに、多数のご来場を賜り、 23年度第2回公開研究会、24年度第1 誠

決するものとして金剛寺本の資料価値を認 な点や「四空義」の重複といった問題を解

敦煌写本の偽作にまで言及された。 広汎な経典伝播の道筋を明らかにされ、 に近い形態であることを明らかにされた。 により、大正蔵本が原テキストの配列順序 に他の文献にみられる引用を参照すること 二年版本)と構成、配列順序を比較し、更 現在の流布本である大正蔵本(底本は延宝

されること、越南写本と敦煌本との関連、

一方で大正蔵本にみられる撰者号の不自然

木村清孝、鶴見大学学長‧本学特任教授)

上記発表の後、ディスカッション(司会